母のスマホ

石垣 明美

母は88歳である。私の家から車で15分ほどのところに一人で住んでいる。本人は隠しているが、元来やんちゃな新し物好きである。孫のスポーツ自転車をうらやましそうに見つめる。「もう少し若ければ私も…」と顔に書いてある。今はデジタルカメラの調子が悪いので使わなくなったが、ちよつと前まではカメラからパソコンに写真を取り込んで送ってきたりしていた。

そんな母は、ガラケーの携帯電話を持っていて、私のスマホをいつもうらやましそうに見つめていた。そして「テレビでスマホ教室を熱心に見ているよ」と言う。「スマホを使ってみたいが、難しそう。世話をかけそうで言い出せない」と顔に書いてあった。

そんなある日の朝、母のガラケーが故障した。固定電話で「携帯ショップに連れて行ってもらいたい」と言ってきた。壊れたにしてはどこかうれしそうである。携帯電話のガラケーはすでにほとんどが廃番だ。ガラケーと同じ操作で使えるガラケー型のスマホ（略称ガラホ）か、高齢者でも使えるらくらくスマホ（略称らくスマホ）かに機種変更をすることになるだろう。

ショップに行く車の助手席に乗った母は、期待と緊張が入り乱れるのか、しばし息がとまっている、そして時おり「はあっ」と息を吐く。

開店10分前のショップに着くと、高齢者が列をなして並んでいた。列の最後尾に並んでいたのは、母のご近所の高齢者仲間であった。母は彼女に「どんな携帯をお持ちなの？」と聞いた。彼女

は「らくらくスマホよ、娘に、頑張ってスマホに慣れなさいって言われてね」

それを聞いて勇気が出たのか、母の目に生気がよみがえった。機種変は「らくスマホ」に決まった。

家に戻ってから、電話のかけ方と受け方を教え、何度か練習して「とりあえず、それだけをできるように慣れてね」と言った。母は好奇心いっぱい顔で「はいっ」と答えた。私は自宅に到着してすぐに母のスマホに電話を試してみた。ちゃんと電話に出ることができた。

翌朝、もう一度電話を試みたが、なぜかつながらない。家まで行ってスマホを見ると機内モードになっていた。

それから数日は使い方を教えるに、私は何度も駆けつけた。母とこんなに毎日、会ったり電話で話したりしたのは、何年振りだろうか。

それが何回か続いたところ、母はうれしそうに、お金の入ったばち袋を差し出した。表にはカタカナと漢字で「バツ金」と書いてある。「何度も来てくれてありがとう。スマホ、変なところをいじった罰金（おわび）」だという。

そのいたずらっ子のようなにつこりした顔は反省などしていない。「また来てね」と書いてあった。

作者 石垣明美

題名 母のスマホ

原典 山陽新聞夕刊エッセー

原典の掲載日 2018.12